

昭和32年3月10日

講演要旨

363—15

③ ACTH（アーマー40単位注）投與時：無機燐は30分後やや増加，90分後投與前の値にもどる．燐リポイドは30分後急激に増大し，後投與前の値に近づく．脂肪は殆んど變化がみられなかつた．

④ シスチン（パニールチン 400mg 靜注）投與時：燐，燐リポイド，脂肪ともにほとんど變化がみられなかつた．

⑤ 硫酸マグネシウム（マグネゾール20cc靜注）投與時：無機燐，燐リポイド變化なく，脂肪は30分やや減少の傾向を示し，後投與前の値に近づく．

⑥ メチルチオウラシル（2%メチオゾール 5 cc靜注）投與時：無機燐は變化なく，燐リポイドはやや増加もしくは變化なく，脂肪は減少の傾向を示した．

5. 晩期妊娠中毒症患者に高蛋白低脂肪療法（蛋白80～100g，脂肪20g以下，總カロリー1800～2000Cal）を實施したところ，逐日の血清燐リポイド，脂肪は漸次減少の傾向を示した．

6. 血清並びに尿中無機鹽類

a) 血清 Na, K, Ca, Mg 各濃度の測定では非妊婦，10ヵ月正常妊婦及び中毒症妊婦との間には著明な差は認められなかつた．

b) 尿中 Na, K 各濃度は分娩前数日の逐日の測定で正常妊婦及び中毒症妊婦間に著差はなく，Ca, Mg では中毒症妊婦の値がやや高値を示した．

c) 中毒症妊婦の各攝取と排泄（尿＋糞便）を逐日的にみると正常妊婦に比し，Na, K, Ca は夫々負平衡が強くなり，Mg では蓄積の傾向がある様に思われた．

11. 重症後期妊娠中毒症 100 例の眼底變化を主とせる後遺症の長期間觀察

（國立東二） 久保 博，*田中龍男
（眼科） 宮下忠男

妊娠中毒症に關しわれわれ臨牀家の取扱う重要な問題の一つとして後遺症がある．

従來の妊娠中毒症後遺症に關する報告は觀察期間が分娩後半年までのことが多かつたが，われわれは子癇40例，子癇を除いた重症後期妊娠中毒症60例に關し，分娩後半年から10年の長期間にわたり残存眼底變化の程度，残存眼底變化と他の全身狀態の後遺症との相關關係，出生兒の發育狀況，後續妊娠との關係などを觀察し，従來の知見と異つた點を認めたので報告する．

1) 眼底變化の残存するものは子癇例では約半數であるが，重症後期妊娠中毒症例ではこれより多く約 $\frac{2}{3}$ であつた．

2) 眼底變化の程度は大半 Wagener の眼底分類で1度であつたが，後續妊娠で重症妊娠中毒症を経過した場合には2度，3度を示すことがあつた．

3) 眼底變化としては網膜血管反射増強，狹細化，白鞘，白斑，黄斑部濁濁，中心窩反射消失などを認めた．

4) 視力低下は，子癇例では眼底變化の残存せるものの殆んどに認められたが，重症後期妊娠中毒症例では眼底變化の残存するものの約半數に認められた．兩者とも眼底變化の残存しない例では殆んど視力低下は認められなかつた．

5) 子癇例では約半數がその後妊娠分娩しており，眼底變化の残存の有無と次回妊娠分娩の有無との間に關連は認められなかつた．

6) 重症後期妊娠中毒症例では患者が再び中毒症になることを恐れ，大半が人工妊娠中絶を行つてゐることは注目すべきことである．

7) 子癇例では眼底變化の残存せるものの約 $\frac{2}{3}$ に全身狀態の後遺症が認められたが，重症後期妊娠中毒症例では兩者の間に相關關係を認めなかつた．

8) 全身狀態の後遺症としては従來高血壓が多いといわれていたが，われわれの例では少數であつた．

9) 出生兒の發育狀況は子癇例でも，重症後期妊娠中毒症でも殆んど變らず良好であり，死亡例は1例もなかつた．

12. 晩期妊娠中毒症における腦波の研究（諸種藥劑投與による波形の變化）

（埼玉小川日赤） *木村忠良

（國立東二） 古明地義憲

われわれはすでに第2回本總會（1950年）にて子癇腦波を，1955年第10回厚生省醫務局研究會及び第11回同會に妊娠中毒症における θ 波の出現について發表したが，今度は晩期妊娠中毒症に諸種藥劑を投與しその腦波に及ぼす影響を追求し興味ある結果をえたので報告する．

われわれは既に妊娠中毒症における（4～8 C/S 波） θ 波の出現率は浮腫，蛋白尿の著明なものに多いことを知り，古くから Zangemeister, Seitz, Schröder が子癇の腦に浮腫のあることを強調しているところから，われわれは大脳皮質における浮腫，循環障礙，代謝異常などが徐波發生の源と考え，急速にこれら浮腫その他の減退消失を企圖し，その一法として高張糖液を靜注したところ，徐波はその周期を短縮し， α 波の頻度は増加し，腦波は全般的に回復傾向を示した．なお高血壓を主徴とするものの腦波は比較的 β 波多く，かつ α 波の連